

徳島市八人塚古墳測量調査報告

東潮・中原計・石村友規・大谷育恵・松浦稔

はじめに

第1章 調査経過

第2章 墳丘測量

第3章 八人塚の墳丘構造をめぐって

第4章 東四国地域の前期古墳における八人塚古墳の位置づけ

はじめに

本書は、徳島市八人塚古墳の測量調査報告である。1966年に八人塚の墳丘調査報告(末永雅雄・森浩一 1966)がなされた。それ以来、古墳時代初期の大形積石塚として注目されてきた。この間、眉山の開発がすすみ、八人塚周辺にゴルフ場が造成され、環境は変貌している。そこで2005年、あらためて八人塚古墳の測量調査を実施した。

阿讃山脈の北麓から讃岐平野、南麓の吉野川流域一帯に、高松市の石清尾山古墳群、徳島三好郡三加茂町の丹田1号墳など積石塚が存在し、「阿讃積石塚分布圏」とよばれている(森浩一 1971)。独特の古墳文化がさかえた地域である。

1999年に名西郡石井町前山古墳(積石塚)の発掘が徳島県立博物館によっておこなわれた。今回の墳丘測量も、阿讃の積石塚分布圏の特質をさぐり、前期の前方後円墳研究のために基礎調査となろう。

調査期間：2005年3月26日～4月11日

調査参加者：中原計(徳島大学埋蔵文化財調査室)、石村友規、大谷育恵、松浦稔(徳島大学大学院人間・自然環境研究科大学院生)、伊藤博史、白鹿宏和(徳島大学総合科学部3回生)、谷川真基(財団法人徳島県埋蔵文化財センター)、原田史郎

本調査を行うにあたり、まず、地権者である眉山カントリークラブ、地藏院には、格別の御配慮をいただきました。また、徳島県教育委員会、徳島市教育委員会には古墳の調査を快諾していただきました。調査期間中には以下の方々から御助言、御助力をいただきました。記して感謝いたします。

大久保徹也(徳島文理大学)、清家章(高知大学)、大北和美、谷川真基、藤川智之(以上財団法人徳島県埋蔵文化財センター)、原田史郎、徳島大学埋蔵文化財調査室(敬称略)(東潮)

第1章 調査経過

1. 周辺の遺跡

八人塚古墳は、徳島市名東町東名東山に所在する、古墳時代前期の前方後円形積石塚である。八人塚古墳は、地理的には徳島平野の中央よりやや東側、気延山、眉山両山塊間より平野部に流れ出る吉野川の支流である鮎喰川下流域の東岸、眉山北西麓に位置する(図1)。この地域には、縄文時代から弥生時代においては、三谷遺跡、庄遺跡、南庄遺跡、名東遺跡、観音寺遺跡、矢野遺跡などの遺跡が集中する。とくに名東遺跡、矢野遺跡にはそれぞれ弥生時代中期、後期の銅鐸が埋納されており、やや上流にも銅鐸埋納地が点在している。また古代においては阿波国府、阿波国分寺、阿波国分尼寺が置かれたことから、この地域は原始・古代においては阿波国の中心地としての役割を担っていた。

周辺の古墳としては、まず、鮎喰川下流東岸地域では前期に八人塚古墳をはじめ節句山1号墳が築かれる。八人塚古墳の周辺には、かつて数基の積石塚古墳が点在していた。中期には、中期前半に節句山2号墳が築かれる以外は古墳の存在が知られていない。後期になると、横穴式石室を主体部とする古墳が築かれるようになり、後期前半にうばのふところ古墳(12m、円墳)、後期後半～終末期には穴不動古墳(18m、円墳)が築かれる。

鮎喰川下流西岸地域には、前期前半に宮谷古墳(37.5m・前方後円墳)を端緒として、奥谷2号墳(18.5m、突出部付円墳)、前期後半には奥谷1号墳(50m、前方後方墳)、八倉比売1号墳、内谷1号墳が築かれる。中期の古墳は確認されていない。後期には、後期前半に尼寺1号墳、後期中葉に城山神社1号墳、ひびき岩古墳群、尼寺2号墳、後期後半～終末期に矢野古墳(17.5m、円墳)が築かれている。

古墳時代の集落遺跡としては、東岸地域では、庄(庄・蔵本)遺跡において前期後半～中期前半の竪穴住居や鉄製品や玉類などが、中期中葉～後期の竪穴住居、須恵器、埴輪などが出土している。南庄遺跡では、中期後半の竪穴住居などの遺構、後期～終末期の須恵器、鉄器、馬具、玉類などが出土している。鮎喰遺跡では弥生時代後期～古墳時代初頭の竪穴住居や土器や鉄器などの遺物、中期竪穴住居が検出されている。名東遺跡では弥生時代後期～古墳時代初頭の住居址や中期後半の竪穴住居、須恵器などが出土している。西岸地域では、矢野遺跡弥生時代後期後半～古墳時代初頭の竪穴住居、後期の遺構、遺物も出土している。敷地遺跡では中期末～終末期にかけての掘立柱建物、竪穴住居が多数検出されており、古代にも継続して集落が営まれる。

以上のことから、この地域では古墳時代中期前葉～中葉にかけて低調な時期があることがわかる。このことは、より南方の地にこの時期に渋野丸山古墳(118m)が築かれることと関連している。八人塚古墳は、渋野丸山古墳周辺地域に中心が移る以前に地域的な支配者としての地位を保っていた鮎喰川下流域の首長墓のひとつと考えられる。その実態を解明することは、徳島の古墳時代前期の動向を考えるうえでも重要であろう。(松浦)

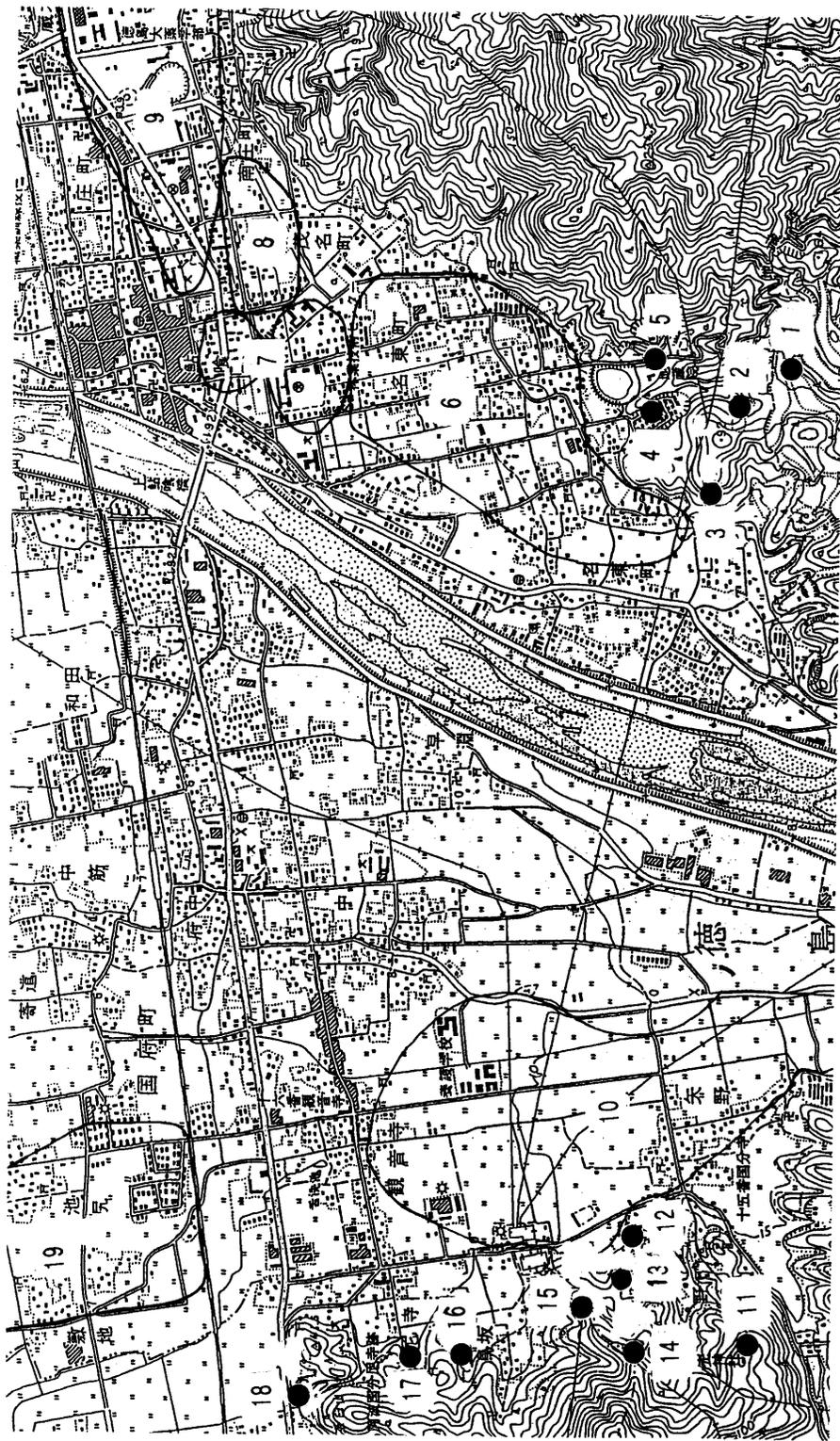


図1 周辺の遺跡

- 1 八人塚古墳 2 うばのふところ古墳 3 諏訪神社古墳 4 節向山古墳群 5 穴不動古墳 6 名栗遺跡 7 鮎喰遺跡 8 南庄遺跡
- 9 庄(庄・蔵本遺跡) 10 矢野遺跡 11 八倉比売遺跡 12 城山神社古墳 13 興谷1号墳 14 興谷2号墳 15 矢野古墳
- 16 内谷古墳群 17 ひびき古墳群 18 尼寺古墳群 19 敷地遺跡

2. 調査の契機

八人塚古墳における過去の調査としては、1966年に末永雅雄、森浩一によって測量調査が行われ、その成果と測量図(図2)が報告されている(末永・森 1966)。それによると、八人塚古墳の墳形・規模は、全長約60m、後円部径約30m、前方部幅約15mの前方後円墳であり、前方部が極めて細長いことが指摘されている。墳丘の特徴は、積石によって構築された積石塚であり、後円部は積石によって築成しているが、前方部は原地形に若干の加工を施すことで前方後円形にしていることである。使用石材は、付近の山中で産出する変成結晶片岩である。埴輪の使用は認められず、その他の遺物も採集されていない。

この調査の結果、八人塚古墳は古式の前方後円墳と考えられ、前方後円形の積石塚としては、最大の規模を有し、積石塚の中でも3番目の規模を誇るものであることから、その重要性が指摘された。また、1974年には、徳島考古学研究グループにより、ゴルフ場建設計画に先立ち、現地の状況の把握がなされ、徳島県、徳島市と開発業者の間で現状を保存する旨の協定書が結ばれた。しかし、その後のゴルフ場建設に伴い、八人塚古墳の前方部が数メートル崩落したことが報告されている(小林 1985)。

以上が過去において八人塚古墳の状況が把握されたものである。つまり、八人塚古墳において行われた調査は、測量調査のみであり、開発による墳丘改変がなされた後は状況を把握した報告はない。遺物に関しては、八人塚古墳から出土したものはこれまで報告されていない。

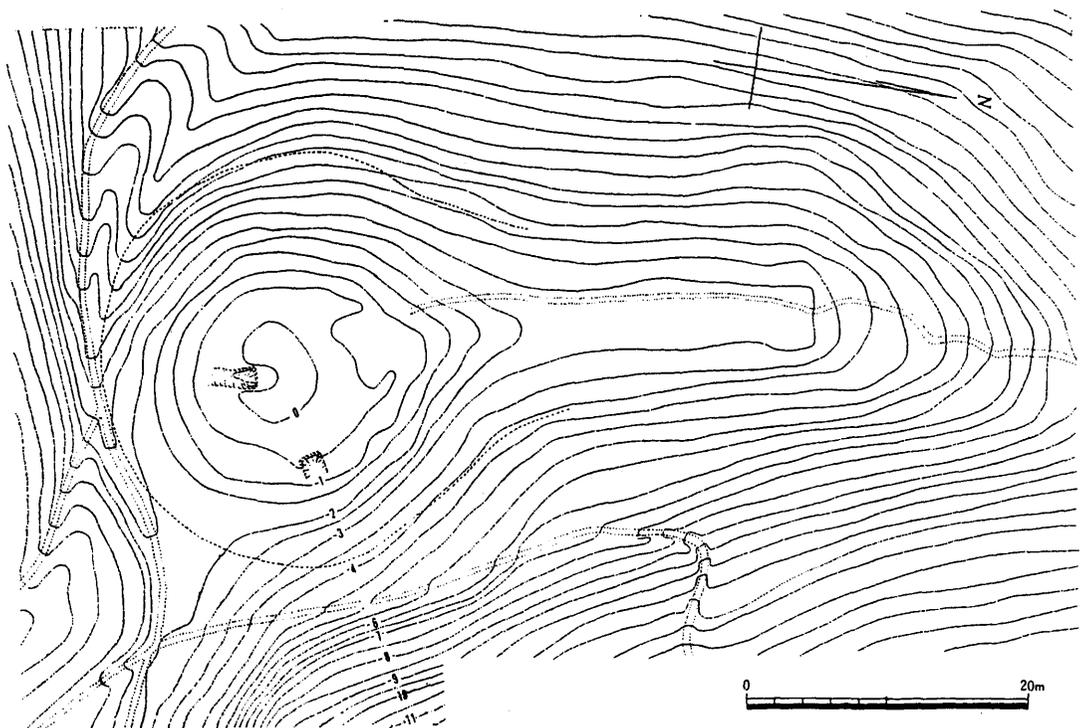


図2 八人塚古墳既往測量図

近年、徳島県内では古墳時代前期に属する古墳の調査が相次いで行われている。徳島県埋蔵文化財センターにより、1990年に板野郡板野町蓮華谷古墳群(Ⅱ)2号墳、1991年に板野郡上板町安楽寺谷1号墳、1998～2000年には鳴門市西山谷2号墳、2000年には鳴門市大代古墳がそれぞれ調査されている(徳島県埋蔵文化財センター1994、1995、2001)。徳島県立博物館では、1996～2000年にわたり名西郡石井町前山1号墳・2号墳の調査を行い(高島2000)、徳島市教育委員会は1989年に徳島市宮谷古墳(一山・三宅1991)、1997～1998年に徳島市奥谷1号墳を調査している(三宅2000)。2000～2002年には、北條芳隆らにより八人塚古墳周辺の古墳の分布調査、数基の前期古墳の測量が行われている(北條2003)。鳴門市萩原墳墓群や同天河別神社古墳群においては、徳島県埋蔵文化財センターや鳴門市教育委員会により現在も継続的に調査が行われ、資料の蓄積が進んでいる。

また、それらの調査成果をもとに、大久保徹也や北條芳隆らにより東四国地域における前方後円墳の成立過程の研究が進められてきている(大久保2002、北條1999、2003)。

このような状況のなかで、八人塚古墳の位置づけがより重要なものとなってきた。八人塚古墳における調査は、現状では1966年に行われた測量調査のみである。その際に作成された測量図は50cmの等高線間隔によるもので、今回は25cm等高線間隔で実施した。また、1974年に墳丘が削平されたことは確認されているが、それがどこまで及んでいるかは正確には把握されていない。そのため、再測量調査を行うことにした。(中原)

参考文献

- 一山典 2001「徳島の前期古墳」『徳島の考古学と地方文化』小林勝美先生還暦記念論集刊行会
- 一山典・三宅良明 1991「徳島県徳島市宮谷古墳」『日本考古学年報』42 日本考古学協会
- 大久保徹也 2002「四国北東部地域における地域的首長埋葬儀礼様式の成立時期をめぐって」『論集徳島の考古学』徳島考古学論集刊行会
- 小林勝美 1985「徳島考古学研究グループの歩み(2)」『徳島考古』第2号 徳島考古学研究グループ
- 末永雅雄・森浩一 1966「八人塚の墳丘調査」『眉山周辺の古墳－恵解山古墳群 節句山古墳群－』徳島県教育委員会
- 高島芳弘 2000「前山古墳群の発掘調査成果」『前方後円墳を考える－発表要旨集－』古代学協会四国支部
- 徳島県埋蔵文化財センター1994「蓮華谷古墳群(Ⅱ)」『四国縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』4
- 徳島県埋蔵文化財センター1995「安楽寺谷墳墓群」『四国縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』13
- 徳島県埋蔵文化財センター2001『阿讃山脈東南麓の古墳群－四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財調査概報－』
- 橋本達也 2000「四国における古墳築造地域の動態」『前方後円墳を考える－発表要旨集－』古代学協会四国支部
- 北條芳隆 1999「讃岐型前方後円墳の提唱」『国家形成期の考古学－大阪大学考古学研究室10周年記念論集－』大阪大学文学部考古学研究室
- 北條芳隆 2003『東四国地域における前方後円墳成立過程の解明』平成12～14年度科学研究費補助金基盤研究(C)(2)研究成果報告書
- 三宅良明 2000「奥谷1号墳」『前方後円墳を考える－発表要旨集－』古代学協会四国支部

第2章 墳丘測量

今回の再測量調査では、より詳細に古墳の形態を把握するため 25cm の等高線間隔で墳丘測量図を新たに作成した (図3)。以下はその調査成果である。

墳丘表面の現況としては、過去の測量図にも表されているが、後円部では、平坦面や東側に攪乱や主体部の可能性がある落ち込みが散見される。後円部南側の長方形の落ち込み周辺などでは、徳島の前期古墳を中心に存在が確認されている白色円礫がみとめられる。後円部東側の落ち込みの断面では、石材による墳丘構築状況を観察することができる。前方部では、ゴルフ場建設に伴い崩壊したことが報告されており (小林 1985)、前方部崩落面には、現在は崩落防止のためのネットが張られている。

後円部は東南から西北に向かって伸びる尾根を切断・整形した後、積石を施したものと考えられる。傾斜変換点は墳丘西側では 122.750m 付近、東側では転石が多く西側に比べて顕著ではないが同様に 122.750m 付近にみとめられる。これらのことから、後円部径は約 24m と推定される。122.750m の等高線と積石の範囲を比較すると、積石の多くが原位置を保っているとみられる墳丘西側では、積石分布域がほぼ同心円状に 122.750m ラインの外側を沿うようにめぐる。一方、墳丘東側は全体的に積石の遺存状況が悪く、原位置を保っているとみられる範囲が確認できないため、現状からみて積石が多く分布する範囲を確認できるのみである。そのため、東方向に積石の分布範囲が広がっている。

後円部南東に存在する平坦面は過去の調査においても測量図に表されているが、形成過程、性格ともに不明である。後円部北側では舌状に等高線が前方部に向かって長く張り出している。

くびれ部は、等高線をみる限り、前方部から後円部へとなだらかに移行している。後円部からみて前方部の中軸が東へ振れているために、西側に比べて東側の方が強く屈曲している。石材の範囲からみると、くびれ部は非常に細く、前方部端に向かってはあまり開いていかない。

前方部は尾根の下方に形成されており、後円部との比高差は 2.5m である。前方部においても、積石ではないが人工的に配置された石材が点在している。その崩落面をネット越しに観察したところでは、前方部平坦面と考えられる部分において同様の石材を確認できた。前方部の左右の裾については、測量図からは明確な変換点をみいだすことはできない。しかし、石材の範囲は 122.750m 付近であり、後円部の墳丘裾、および積石範囲とほぼ一致することから、この付近であろうと思われる。

以上のことから、八人塚古墳の規模は、後円部径約 24m、前方部長約 21m、前方部幅約 6m であり、前方部削平後の最初の調査である今回の調査によって判明した墳丘残存長は約 45m である。

今回の測量結果と過去の調査結果の間では、墳丘の規模が大きく相違する。前回の調査では、後円部径約 30m、前方部幅 15m、全長は約 60m とされている。前方部は削平されているためであり、後円部は積石が確実に原位置を保っている範囲から復元したためであると考えられる。前回の調査も今回も測量調査であり、正確な墳丘規模と原形を知るためには発掘調査に委ねるほかはない。(大谷)

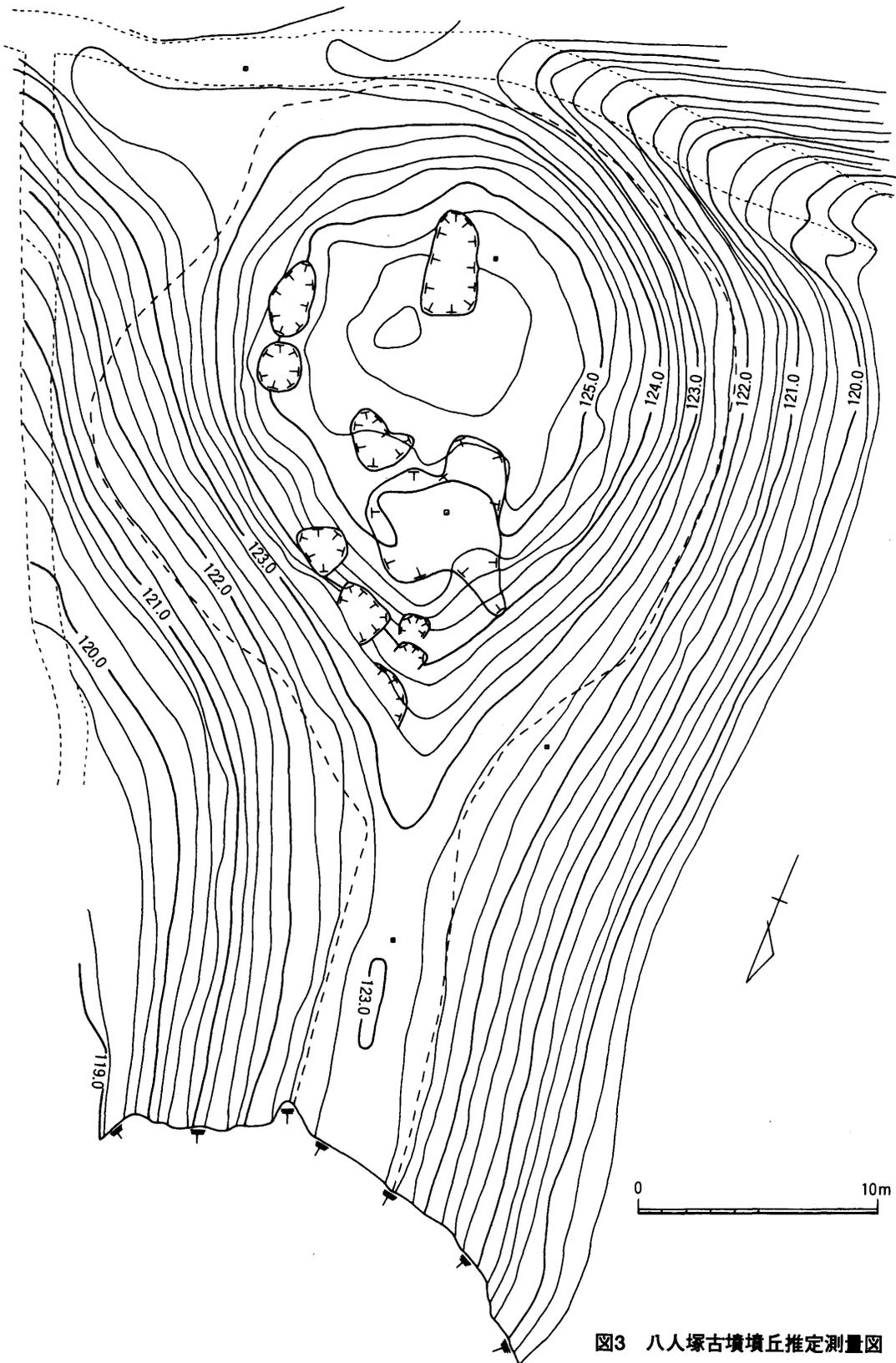


图3 八人塚古墳墳丘推定測量図

第3章 八人塚の墳丘をめぐって

今回の調査の主な目的は、測量図の作製と墳丘の現状把握であり、これらについてはほぼ達成されたと考えられる。しかし、それに伴い様々な課題が認識されるようになった。

今回の調査によって明らかになったことについてであるが、1966年の調査では、前方部には積石はみとめられないとされていた。今回の調査では、前方部は積石ではないものの、石を敷いている状況が確認できた。また、この状況は削平されて崖面になっている部分でも確認できた。しかし、墳丘が石材のみで構成されているのか、地山成形または盛土部分の有無については確認できていない。

また、墳丘の現状については、本調査において確認された、残存している墳丘の全長は約45mであった。1966年の調査報告では約60mとされていることから、後円部径が5m小さくなったことをふまえば、前方部は10mも削平されていることになる。徳島考古学研究グループの報告によると、数メートル崩壊となっているが、被害はもっと大きなものであった可能性がある。しかし、これらは発掘調査成果に基づくものではないため、詳細は不明である。

つぎに、本調査では明らかにしえなかった課題についてまとめておく。

まず、墳丘の規模についてであるが、過去の測量調査において、前方後円形の積石塚としては最大の規模を持つことから、その歴史的重要性が指摘されている。しかし、全長については発掘調査によって墳丘裾を確認し、そこから導き出されたものではない。前方部側の裾は完全に消滅しており、確認する術はないが、後円部側については南側を通る道によって削平を受けた部分が存在する可能性があり、確認する必要があると考えている。同時に、積石の範囲についても明らかにする必要がある。

また、古墳に付属しているかどうかは不明ではあるが、後円部南東に平坦面が存在している。この平坦面は1966年の調査報告においても測量図に表現されている。しかし、報告においては特に言及はされていない。現状では、平坦面の表面には拳大の礫が集積しており、人工的なものの可能性も否定できない。

最後に、八人塚古墳の位置づけに大きく関わってくることであるが、これまでの調査、報告においては遺物が確認されておらず、今回の調査においても採集することはできなかった。そのため、墳丘形態から時期を推定する以外に、詳細な時期を決定することは困難な状況にある。

以上のように、今回の測量調査で得られた知見は少ないながらも、前回の調査とは異なった情報を得ることができた。しかし、残された課題が多くあり、発掘調査などの調査を継続的に行わなければ分からないことも多い。そのため、今後そのような機会に恵まれれば、これらの課題を少しでも解決できるように努力しなければならない。(中原)

第4章 四国北東部地域の前期古墳における八人塚古墳の位置づけ

1. はじめに

四国北東部地域では、八人塚古墳をはじめ、古墳時代前期に積石塚古墳が散見される。積石塚は、その成立の要因が、かつては梅原末治、笠井新也らによって、地理的要因（梅原 1933）か、思想的背景（笠井 1933）かの論争が行われた。また、丹田古墳を調査した森浩一によって、その分布が讃岐、阿波に集中することから、「阿讃積石塚分布圏」が提唱される（森 1971）など、その成立要因や分布域などが研究対象にされてきた。

その後もそれらに関する研究が進み、玉城一枝は盛土墳との比較により積石塚が高所に立地することを指摘した（玉城 1985）。菅原康夫は弥生時代終末期の積石墓から積石塚古墳へ連続したととらえる（菅原 1996）。

近年では盛土墳を含めた、四国北東部地域における古墳の成立に関連する研究に論点は移行している。北條芳隆は、近畿中部における前方後円墳の成立に東四国地域が強い影響を与えたとし、前期古墳の多様性とその一様式である「讃岐型前方後円墳」を提唱するにあたって、地域性の発現の一要素として、積石による墳丘構築を挙げた（北條 1999、2000）。また栗林誠治は、弥生時代中期から終末期における、従来「積石墓」・「集石墓」などと呼称されてきた墓制を提示し、用語整理をおこなったうえで、菅原が指摘した連続性は、「同一地域内における発展的連続性ではなく、複数地域間における墓制構成要素授受によってはじめて成立する連続性である」とした（栗林 2003）。

上記以外にも、四国北東部地域における前方後円墳出現期の政治構造を論考の中心にした大久保徹也の研究（大久保 2000、2002）や、他地域との交流を論点の中心にした橋本達也の研究（橋本 2000）、墳丘や埋葬主体部などに使用されている石材に着目した蔵本晋司の研究（蔵本 2003）など、この時期の研究はさかんにおこなわれている。

今回の調査はこれらの研究の進展を目的に、八人塚古墳の資料化を試みたものである。墳丘測量調査のみのため得られた情報は多いものではないが、ここでは調査参加者の一人として八人塚古墳に関する若干の見解をのべることにしたい。

2. 八人塚古墳の墳丘

まず第2章の墳丘測量成果と重複する部分もあるが、測量成果をもとに墳丘の復元を試みたい。

後円部 尾根上方に位置し、南から北に向かって伸びる尾根を切断・整形し、積石を施すことによって築成している。後円部は、東側・西側ともに 122.750m 付近に傾斜変換点が確認され、ここから後円部径を求めると約 24m になる。南側の後円部裾は、現在アスファルト舗装の道が造られているため確認することはできないが、西側から等高線が谷状に入り込んでくる地形の中に求めて問題ないと思われる。

旧測量調査では、後円部径が約 30m とされているため、今回の調査から復元した約 24m というのは、その数字よりも大幅に小さくなる。しかし、西側の 120.250m、東側の 120.500m 付近でも傾斜変換点が見られ、東側はくびれ部においても 120.500m で傾斜変換点が確認される。これを基に後円部径を復元すると約 32m になり、従来考えられていた数値に近づく。ただし、この数値で後円部を復元しようとすると、後円部南側が南方から伸びてくる尾根に入り込み、後円部が全周しないことになる。東四国地域では、後円部の墳丘外の段築(蔵本 1995)が、香川県の鶴尾神社 4 号墳や横立山経塚古墳、鶴の部山古墳にみられることから、八人塚古墳も同様に、尾根を土壇状に整形し、その上に積石を施した可能性も想定できる。

前方部 積石(葺石) はみられるが、後円部に比べかなり少量であり、尾根下方に築成されていることも手伝ってきわめて低平な印象をうける。四国北東部地域に分布する積石塚古墳はほとんどが丘陵上に立地し、前方部を尾根上方に向ける傾向にある⁽¹⁾。そのため低平な前方部であってもベースとなる地形が高くなっていくため、八人塚古墳とはちがいが、結果的に一定の高さを保持することになる。この点からは積石塚古墳のなかで、八人塚古墳は異質な存在のように思われるが、八人塚古墳が存在する吉野川下流域南岸の前期古墳は、徳島市宮谷古墳、石井町前山 1 号墳、前山 2 号墳、山ノ神古墳のように前方部を尾根下方に向けるものが主体的である⁽²⁾。このことから積石塚という東四国地域の一部古墳で共有される要素を保持しながらも、前方部築造方向は、吉野川下流域南岸という小地域の原則に従っている。古墳時代前期における四国北東部地域の多様な墓制の一端を表している。

前方部の裾に関しては、前方部先端を欠失しているため確認できない上に、側面に関しても、そのまま自然地形に移行するため、等高線からは明瞭な傾斜変換点は見出すことができない。地表上で確認できる積石(葺石)の分布範囲は狭長に伸び、現状ではいわゆる柄鏡形を呈するが、先端部を欠失しているために、バチ形に広がる可能性も否定はできない。

くびれ部 測量図からは、明瞭な屈曲点をもたず、後円部から前方部に向かってなだらかに移行することから、香川県鶴尾神社 4 号墳に類似する形態をとるように思われる。しかし、測量図ではそのように見える香川県野田院古墳では、発掘調査によって明瞭な屈曲点をもつことが確認されている。それを示すように、西側くびれ部において屈曲点と思われる石列が確認されたが、発掘調査により詳細を確認したものではないため断定はできない。

以上、八人塚古墳の墳丘の復元を試みた(図 4)。しかし検討材料となるものが墳丘測量図のみであり、推測の域を出るものではなく今後の調査による資料増加に期待したい。

3. 八人塚古墳の特性

次に、今回の測量成果と調査中の観察から八人塚古墳の特性を述べていくことにする。

墳丘形態 まず墳丘形態の特徴であるが、積石部のみが墳丘範囲と仮定すると、残存部の値にしても後円部と前方部の比率が 1 : 1 に近くなり、前方部の狭長さが目立つ。讃岐の一部の前期前方後円墳に関しては、後円部と全長による比率を、岸本直文が指数化している(岸本 1986)。それを基に四国北東部地域、四国北東部地域との関係が論じられている西播磨地域(中溝 1998 など)の積石塚前方後円

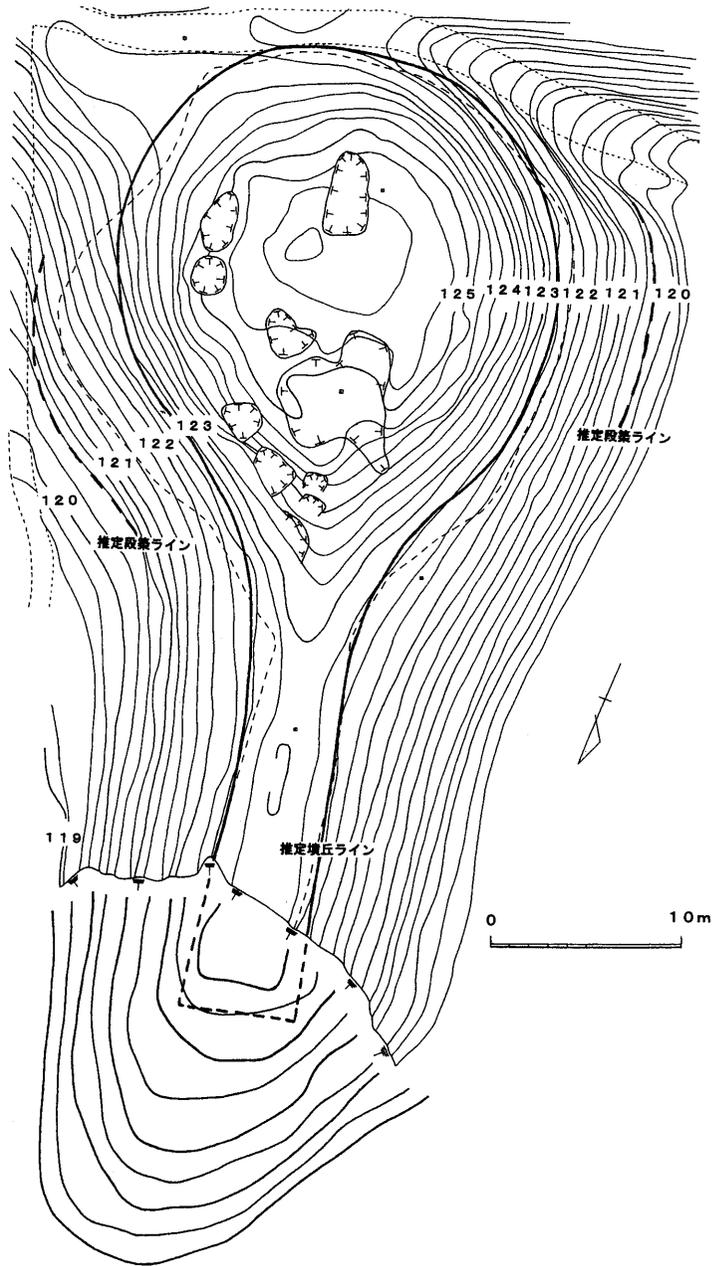


図4 八人塚古墳墳丘推定復元図

墳(前方後円形墳・突出部付円墳含む)と、一部の盛土前方後円(方)墳の比率を指数化した(表1)。八人塚古墳は墳丘残存値においても1.88になるため、前方部が完存していれば、それ以上の値を示したことになる。そこで旧測量図と今回の測量図を重ね合わせてみると、少なくとも4m程度墳丘長が伸びると考えられる。仮に墳丘長が4m伸び、墳長49mとすると、指数値は2.04になる。指数値が2.00を超える値を示したものをみると、讃岐を中心にして積石塚に多くみられることがわかる。また墳形が判明しているものの多くは、北條が「第3形態(鶴尾神社類型)」とした墳形を採る(北條2003)。この分類において北條は、八人塚古墳を「第2形態」に分類している。「第2形態」は「くびれ部から前方部前面にかけて開きをみせず、いわゆる柄鏡形の前部を有するが、第1形態にくらべると前方部が長く、後円部径の約8割程度の長さを有するもの」としている。今回の測量図面からみると、柄鏡形の前部部という点は整合するが、前方部長が後円部径の8割程度という点には疑問が残る。しかし、今後の発掘調査によって墳丘形状が確定できれば整合する可能性もある。

墳丘外の段築 次に、後円部の墳丘外の段築について検討する。四国北東部地域において、後円部の墳丘外に段築を設けるものは、前節でも述べたが、鶴尾神社4号墳、横立山経塚古墳、鶯の部山古墳が挙げられる(図5)。八人塚古墳以外はすべて積石による墳丘外の段築であり⁽³⁾、丘陵上に立地する鶴尾神社4号墳、横立山経塚古墳は後円部を平野、もしくは海の方角に向ける。平野や海上など、下から古墳を見上げた時に、後円部をより大きく見せる効果を狙ったものであろう。残る鶯の部山古墳は標高10m程度の低丘陵上の水平面に立地する。現在は津田湾に突き出た岬の根元に位置するが、古墳が築成された当時は島であった可能性が指摘されている。墳丘外の段築が確認された方向は、現状では海に近接する側ではなく、岬の中軸に向かった方向である。しかし築成時に島であったならば、島の南端部に位置し海からの眺望に非常に優れた立地といえる。鶯の部山古墳の墳丘外の段築も海上からの眺望を意識したものであろう。

一方、八人塚古墳は後円部が尾根上方に位置しているため、尾根下方から見上げた場合、前方部の向こう側に後円部を見ることになる。そのため本来は、香川県稲荷山姫塚古墳にみられるように前方部側に墳丘外の段築を設ける方が効果的である。このことから、前方部を介して後円部を見るという場所も存在したと考えられ、その場合に被葬者が埋葬された後円部を誇示、強調するための段築であったのではないかと想定する。ただし古墳は谷地形の奥まった場所に立地するため、東側は眉山そのものによって眺望は遮られている。また、現在は眺望が優れている気延山方向も、ゴルフ場が造成される前は、八人塚古墳が立地する尾根のすぐ西側にも別尾根が存在していたため、現在のように眺望が優れていたとは考えがたい。そのため古墳を見ることが出来る範囲は、現状よりも限定されていた。

墳丘構築技法 墳丘は積石が確認できる部分においても、表面に見えている石の大半が、攪乱、転落などで原位置を保っていない。わずかに後円部東側くびれ部よりの付近で、板石を垂直に近い角度で積み上げる技法が確認された。類例としては、鶴尾神社4号墳のくびれ部墳裾列石が挙げられる。

積石塚古墳の墳丘構築技法を明らかにしたものとしては、野田院古墳の調査がある。野田院古墳も後円部墳丘表面は、基底部から垂直に石を積み上げるが、使用される石材は板石に加え、ブロック状の割石も用いている。これは野田院古墳においては、主体部にもブロック状の割石が使用されている

ことから、板石のみを選別して使用するという意識がさほど働いていなかったのであろう。また野田院古墳では、調査時の写真からは、墳丘内部を拳大程度の石を多用し充填しているようにみえる。一方、八人塚古墳は、野田院古墳と比較すると、墳丘内部まで大形の石材によって構成されている。ただし攪乱によって程みが生じた部分での観察結果によるものであり、発掘調査による確認ではない。

鮎喰川下流域の気延山周辺では、盛土古墳においても、垂直に近い角度で葺石を積上げる事例がある。天羽利夫は長谷古墳、曾我氏神社1号墳、曾我氏神社2号墳の墳丘構築技法について検討した(天羽 1984)。天羽は、副葬品などから長谷古墳→曾我氏神社古墳群への流れを想定し、その上で墳丘構築技法の変化を指摘、近接した2古墳間で、墳丘構築技法の技術的発展過程が確認されたことを重要視している。また橋本達也は、大阪府松岳山古墳・茶臼塚古墳・玉手山1号墳の墳丘裾部の板石垂直積みは、石清尾山古墳群や気延山古墳群中の墳丘構築技法と同一であり、四国北東部地域では萩原1号墓・鶴尾神社4号墳の段階にすでに確立していることから、これらの古墳の築造に四国北東部地域、特に高松平野周辺の集団が関与している可能性が高いとした(橋本 2000)。橋本はそれに加え、埴輪・東西頭位・白色円礫・結晶片岩に着目し、四国北東部地域と近畿中部地域との関連性を指摘している⁽⁴⁾。

以上のように八人塚古墳など四国北東部地域にみられる積石塚古墳では、個々に細かな差がみられるものの、墳丘を垂直に近い角度で構築するなど、基本的な墳丘構築技法を共有していた可能性が高い。また、その構築技法は、四国北東部地域の一部盛土墳、さらに近畿中部の松岳山古墳・茶臼塚古墳にも共有される。墳丘構築技法を共有するということから、三者がどのような関係であったか、具体的に想定することは容易ではないが、密接な関係であったことは確かである。

前方後円墳の前方部に方墳が接する事例 さらに青木敬は、松岳山古墳と茶臼塚古墳を、前方後円墳に接する形で方墳が位置する事例として挙げ、同様な事例が石清尾山古墳群中にも認められるとし、関連性を想定している(青木 2002)。青木は古墳名を挙げていないが、北大塚古墳とその前方部に接する方墳の組合せであろう。前方後円墳の前方部に方墳が近接するという立地は、香川県陣ノ丸古墳群にもみられる。橋本の指摘に加え、青木が指摘した、前方後円墳・方墳のセット関係は、讃岐と松岳山古墳・茶臼塚古墳の関連性を追認できるものでであろう(図6)。ただしこの関係は讃岐においても少数であり、普遍的なものではない。

八人塚古墳も古墳群を形成していたと考えられているが(北條 2003)、現在はその大半が消滅してしまい、墳丘形状や位置関係は明らかではない。旧測量図をみる限り、前方部先端の隣接した位置に方墳はみられない。阿波の他の前方後円墳にも方墳とのセット関係がみられないことから、讃岐の一部の古墳と、松岳山古墳・茶臼塚古墳にだけ共有された特性であるといえる。

4. おわりに

最後に積石塚前方後円墳の成立(四国北東部地域の前方後円墳の成立)に関して、検討を要する事例を提示したい。それは西播磨の岩見北山積石塚4号墓の評価である。

従来、四国北東部地域の前方後円墳の成立を論考する中で注目されてきた資料としては、萩原1号墓と鶴尾神社4号墳が挙げられる。最大の画期をどちらの出現に求めるかという部分に関しては諸説

あるが、萩原1号墓から鶴尾神社4号墳の段階で諸様式が完成し、この地域における前方後円墳の成立がなされたといつて問題はないであろう。その時期は、萩原1号墓が庄内式期前半から後半、鶴尾神社4号墳が庄内式期後半から布留0式期に求められている(大久保2000・北條2003など)。

一方、岩見北山積石塚4号墓は、以前は4世紀前後に位置づけられていた(岸本2000)。しかし近年の評価をみると、弥生後期から庄内式期(中溝2005)、庄内式新段階(寺沢2005)と、萩原1号墓に近接する時期、もしくは遡る時期に比定されている。岩見北山積石塚4号墓は発掘調査がなされていないため、詳細は不明であるが、讃岐産の土器が採集され、墳形は前方後円形⁽⁵⁾を呈し、竪穴式石槨を内包すると考えられている。つまり3地域において、近接した時期に、内容が近似する⁽⁶⁾積石塚墳墓が築造された可能性が高い。栗林が指摘した「複数地域間における墓制構成要素授受」によって成立しつつあった墓制が、3地域間で連動的に共有された結果と考えられる。

時期的には、西播磨・阿波が先行するが、その後の積石塚古墳の展開をみると、積石塚という墓制を共有する集団内で、中心的な役割を果たしたのは讃岐であったと考えられる。

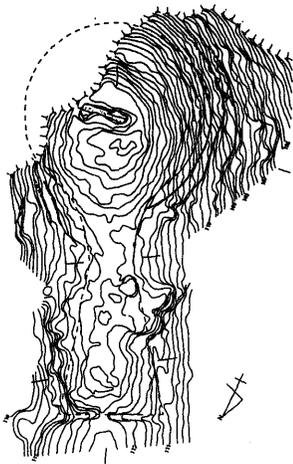
西播磨では、岩見北山積石塚4号墓以降、円形の積石塚墳墓である岩見北山積石塚1号墓などの築造はみられるが、前方後円形の積石塚墳墓、積石塚古墳は築造されない。古墳時代前期においても土器の搬入や墳形⁽⁷⁾などにおいて讃岐との親縁性は窺えるが、積石塚という要素は早い段階で破棄された可能性が高い。

阿波においては、萩原1号墓以降、丹田古墳・八人塚古墳・奥谷2号墳という前方後円墳、突出部付円墳が築造されるほか、八人塚古墳の周辺には積石塚の古墳群が形成されるなど、西播磨と比較すると積石塚という要素が広く展開する。しかし、多数の積石塚前方後円墳を築造するような古墳群は形成されず、その築造も単発的なものに終わる。

一方の讃岐は、石清尾山古墳群を中心に多くの積石塚前方後円墳が築造され、また小地域内の首長墓として継続的に築造される例がみられるなど、他の2地域と比較すると積石塚に対する意識が強いといえる。それは鶴尾神社4号墳・猫塚古墳と、盛土墳を含めても、讃岐内において同時期の最大規模墳である古墳が存在し、一定の期間は積石塚を築造する首長が讃岐地域の中心的な存在であったことから追認できよう。

以上のように前方後円墳成立期に関しては、西播磨と四国北東部地域は密接な関係をもっていたことは明らかであり、四国北東部地域における前方後円墳の成立を考える上で、岩見北山積石塚4号墓の存在は無視できないものである。しかし、積石塚という墳丘構築技法を共有する一方で、その継続性や地域内におけるあり方には違いがみられるなど複雑な状況にある。四国北東部地域における前方後円墳の成立を考える上で、その地域内に収まりがちな視点を広げる必要がある。

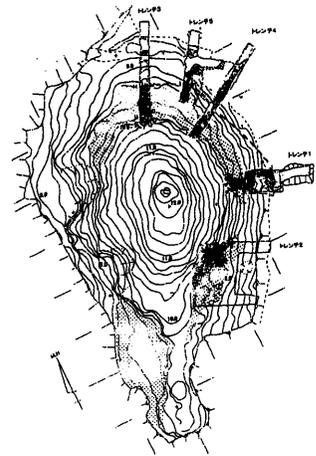
八人塚古墳をはじめ、四国北東部地域・西播磨地域では、弥生時代終末期から古墳時代前期にかけて、積石による墳丘構築という一つの墓制が共有される。その中で八人塚古墳に関する従来の位置付けは、「積石塚前方後円墳において最大規模墳である」という程度のものであり詳細は不明であった。今回の調査結果を考慮してもいまだ不明な部分も多いが、規模に関しては若干縮小される可能性が高い。築造時期は、今回の調査時においても表採遺物の発見はできず不明といわざるをえない。ただし



鶴尾神社4号墳



横立山経塚古墳



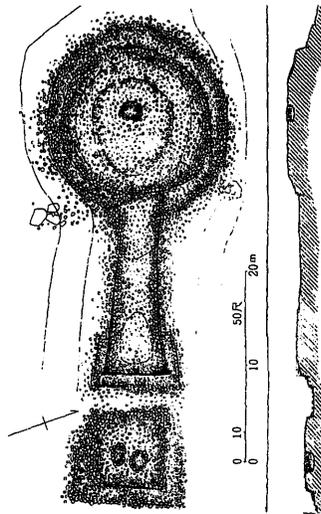
鶴の部山古墳

図5 墳丘外段築をもつ積石塚古墳 (S=1/800)

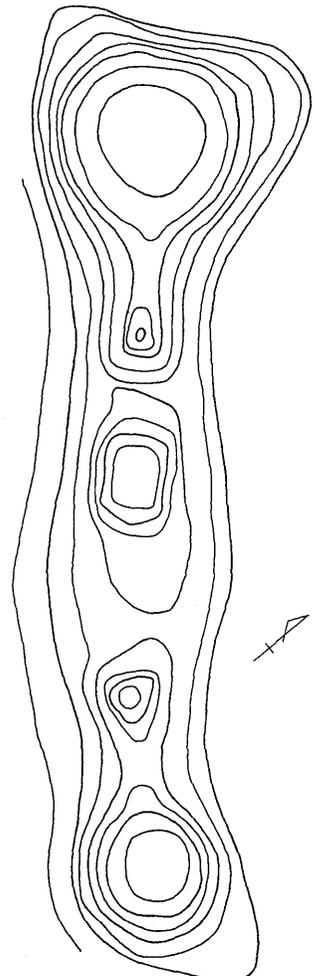
(太線の実線・破線が墳丘外段築のライン)



松岳山古墳・茶臼塚古墳



北大塚古墳



陣ノ丸古墳群

図6 前方後円墳の前方部に方墳が接する事例

(松岳山古墳・茶臼塚古墳はS=1/2000、北大塚古墳、陣ノ丸古墳群はS=1/800)

表1 前方後円墳指数表

名称	所在地	墳丘	全長(m)	後円(方)部径(長)(m)	前方部長(m)	指数(全長/後円部径)
八人塚古墳	阿波	積石	残存45	24	21	1.88以上
丹田古墳	阿波	積石	37	17	20	2.18
萩原1号墓	阿波	積石	26.5	18	8.5	1.47
足代東原1号墓	阿波	積石	16.5	11	5.5	1.50
奥谷2号墳	阿波	積石	18.5	11.6	7	1.61
鶴尾神社4号墳	讃岐	積石	40	19.7	20.3	2.03
霧ヶ松古墳	讃岐	積石	49	25.4	23.8	1.93
野田院古墳	讃岐	積石	44.5	21	23.5	2.12
ハカリゴロ古墳	讃岐	積石	45	25.7	19.3	1.75
摺鉢谷9号墳	讃岐	積石	27.4	13.1	14.3	2.09
大麻山梳篦塚古墳	讃岐	積石	39	20	19	1.95
大麻山経塚古墳	讃岐	積石	30.9	17.7	12.5	1.75
川東古墳	讃岐	積石	39	20	19	1.95
階の部山古墳	讃岐	積石	33	16	17	2.06
姫塚古墳	讃岐	積石	41	21	22	1.95
北大塚古墳	讃岐	積石	40	19.5	20.5	2.05
北大塚西古墳	讃岐	積石	19	9	10	2.11
稻荷山姫塚古墳	讃岐	積石	49	27	22	1.81
稻荷山1号墳	讃岐	積石	32	18	14	1.78
石船塚古墳	讃岐	積石	57	30	27	1.90
小塚古墳	讃岐	積石	17	10	7	1.70
横立山経塚古墳	讃岐	積石	33.5	20	16	1.68
大盛経塚古墳	讃岐	積石	32	16	16	2.00
丸山1号墳	讃岐	積石	39.3	21	18.3	1.87
横山経塚1号墳	讃岐	積石	36.5	18	18.5	2.03
横山経塚2号墳	讃岐	積石	36	20	16	1.80
経の田尾古墳	讃岐	積石	33	21	12	1.57
岩見北山積石塚4号墓	西播	積石	23	12	11	1.92
宮谷古墳	阿波	盛土	37.5	25	12.5	1.50
前山1号墳	阿波	盛土	18.7	9.7	9	1.93
前山2号墳	阿波	盛土	18	11	7	1.64
奥谷1号墳	阿波	盛土	50	27	23	1.85
宝幢寺1号墳	阿波	盛土	47	28	19	1.68
愛宕山古墳	阿波	盛土	64	44	20	1.45
大代古墳	阿波	盛土	54	31	23	1.74
丸井古墳	讃岐	盛土	29.8	12.8	17	2.33
高松茶臼山古墳	讃岐	盛土	75	35	40	2.14
吉岡神社古墳	讃岐	盛土	55.6	28	28.4	1.99
丁願塚古墳	西播	盛土	104	53	51	1.96
兼久山1号墳	西播	盛土	32	17.4	14.6	1.84
権現山51号墳	西播	盛土	43	20	22.7	2.15
景雲寺山古墳	西播	盛土	52	27	25	1.93

吉野川南岸において積石塚前方後円墳・突出部付円墳が築造されるのは、前方後円墳集成2期、丹田古墳・奥谷2号墳であると考えられ、したがって八人塚古墳も近接した時期に築造されたと想定したい。丹田古墳・奥谷2号墳と同様の集成編年2期、もしくはやや大形の墳丘規模を考慮すると、2墳に後出する集成編年3期の築造と考えられる。積石塚古墳である点、尾根下方に前方部方向を向ける点の双方から考えると、讃岐と親縁関係にある在地首長が築造したものであろう。

以上、八人塚古墳とそれに関連する事象について簡単な考察をおこなった。八人塚古墳の位置づけについては、発掘調査をおこなっていないため流動的であるが、現状における考察としての意味をあたえたい。(石村)

注

- (1) 蔵本晋司は、香川県下の前方後円墳について「舌状丘陵上に構築された古墳のうち、後円部を尾根下位に設定されたものが多いことに気付く。特にこの傾向は東讃地域に顕著であり、善通寺周辺では逆に前方部を平野部側に向ける古墳が多数をしめる。」と述べている(蔵本 1995)。しかし大麻山椀貸塚古墳・大麻山経塚古墳など、古墳時代前期においては善通寺周辺も、前方部を尾根上方に向けるものが主体的であろう。
- (2) 考古フォーラム蔵本において測量成果を発表した際に栗林誠治氏からご教示頂いた。
- (3) 八人塚古墳の段築に関しても、積石が埋没している可能性もある。詳細は今後の調査に委ねたい。
- (4) 近年、茨木将軍山古墳において、東四国地域との関連性が指摘されている壺形埴輪が確認された(廣瀬 2005)。また北條によって徳島県愛宕山古墳と墳丘規格を共有する(愛宕山古墳が将軍山古墳の約二分の一)という指摘がなされた(北條 2003)。以前から後円部堅穴式石槨が結晶片岩によって構築されていることから、東四国地域との関係が指摘されてきたが(都出比呂志 1986)(宇垣匡雅 1987)、より密接な関係であったことが想定される。
- (5) 中溝康則は前方後方墳としているが、墳丘実測図をみる限り前方後円墳と考えられる。
- (6) 蔵本は岩見北山積石塚4号墓の墳丘上においても円礫が確認されたことから、東四国地域で共有された円礫堆儀礼をおこなっていた可能性を指摘している(蔵本 2003)。
- (7) 盛土墳であるが、丁瓢塚古墳・養久山1号墳・景雲寺山古墳が鶴尾神社4号墳と同一規格と考えられている(岸本道 2000)。この墳形に関して、北條は「鶴尾神社類型」(北條 1999)、澤田秀実は「丁瓢塚類型」(澤田 1993)としている。筆者は同一規格内において最古の事例である鶴尾神社4号墳を指標とした北條の類型が妥当と考える。

参考文献

- 青木敬 2002 「前期古墳の構築法と玉手山古墳群」『玉手山古墳群の研究Ⅱ－墳丘編－』柏原市教育委員会。
- 天羽利夫ほか 1984 「長谷古墳調査報告」『徳島県博物館紀要』第 15 集、徳島県博物館。
- 天羽利夫・岡山真知子 1982 「曾我氏神社古墳群調査報告」『徳島県博物館紀要』第 13 集、徳島県博物館。
- 一山典 1981 「徳島県奥谷 2 号墳」『日本考古学年報』33、日本考古学協会。
- 一山典 2001 「徳島の前期古墳」『徳島の考古学と地域文化 小林勝美先生還暦記念論集』小林勝美先生還暦記念論集刊行会。
- 宇垣匡雅 1987 「竪穴式石室の研究－使用石材の分析を中心に」『考古学研究』第 34 巻第 1 号(上)・第 34 巻第 2 号(下)、考古学研究会。
- 梅原末治 1933 『讃岐高松石清尾山石塚の研究』京都帝国大学文学部考古学研究報告第 12 集、京都帝国大学文学部。
- 大久保徹也 1999 「首長墓からみた讃岐地域の動向－地域的結集と解体 首長層の階層分化－」『古墳の形と分布から何がわかるか』宮崎県埋蔵文化財センター。
- 大久保徹也 2000 「四国北東部地域における首長層の政治的結集－鶴尾神社 4 号墳の評価を巡って－」『前方後円墳を考える』古代学協会四国支部第 14 回大会研究発表要旨集、古代学協会四国支部。
- 大久保徹也 2002 「〈民族〉形成のメカニズムと前方後円墳の論理」『考古学研究』第 49 巻第 3 号、考古学研究会。
- 大久保徹也 2005 「四国の前・中期古墳築造状況」『前半期の首長墳の消長』中国・四国前方後円墳研究会。
- 香川県教育委員会 1988 『香川県埋蔵文化財調査年報』昭和 58 年度～昭和 62 年度。
- 笠井新也 1933 「讃岐石清尾山の石塚について」『考古学雑誌』第 23 巻第 12 号、日本考古学会。
- 柏原市古文化研究会 1986 「松岳山古墳群」『柏原市埋蔵文化財発掘調査概報』1985 年度。
- 柏原市古文化研究会 1987 『松岳山古墳墳丘範囲確認調査概報』1986 年度。
- 岸本直文 1988 「丁瓢塚古墳測量調査報告」『史林』第 71 巻 6 号、史学研究会。
- 岸本道昭 2000 「前方後円墳の多様性－揖保川水系を素材として－」『前方後円墳を考える』古代学協会四国支部第 14 回大会研究発表要旨集、古代学協会四国支部。
- 蔵本晋司 1995 「香川県高松市三谷石舟古墳の再検討」『香川考古』第 4 号、香川考古刊行会。
- 蔵本晋司 2000 「四国北東部における前方後円墳創出期の諸要素」『前方後円墳を考える』古代学協会四国支部第 14 回大会研究発表要旨集、古代学研究会四国支部。
- 蔵本晋司 2003 「四国北東部地域の前中期古墳における石材利用についての基礎的研究」『関西大学考古学研究室開設五拾周年記念考古学論叢』関西大学考古学研究室開設五拾周年記念考古学論叢刊行会。
- 栗林誠治 2003 「弥生時代・東四国における墓制の様相」『新世紀の考古学－大塚初重先生喜寿記念論文集－』大塚初重先生喜寿記念論文集刊行会。
- 栗林誠治 2005 「阿波の前方後円墳編年(表)」『前半期の首長墳の消長』中国・四国前方後円墳研究会。
- 近藤玲 2002 「徳島県の弥生時代における墓制について」『論集 徳島の考古学』徳島考古学論集刊行会。
- 笹川龍一ほか 2003 『史跡有岡古墳群(野田院古墳)保存整備事業報告書』善通寺市文化財保護協会。
- さぬき市教育委員会 2005 「鶴の部山古墳」『さぬき市内遺跡発掘調査報告書』。
- 澤田秀実 1993 「前方後円墳の成立過程」『東京都埋蔵文化財センター研究論集』12、東京都埋蔵文化財センター。

- 末永雅雄・森浩一 1966『眉山周辺の古墳』徳島県文化財調査報告書第9集 徳島県教育委員会。
- 菅原康夫 1983「徳島における発生期積石塚の様相」『考古学ジャーナル』225号、ニューサイエンス社。
- 菅原康夫編 1983『萩原墳墓群』徳島県教育委員会。
- 菅原康夫 1996「徳島県における前方後円墳成立前後」『中四研だより』4号、中国・四国前方後円墳研究会。
- 菅原康夫 2000「萩原墳丘墓をめぐる諸問題」『前方後円墳を考える』古代学協会四国支部第14回大会研究発表要旨集、古代学協会四国支部。
- 菅原康夫 2001「まとめ」『阿讃山脈東南縁の古墳群—四国縦断自動車道建設に伴う埋蔵文化財調査概報—』財団法人徳島県埋蔵文化財センター。
- 高島芳弘 2000「前山古墳群の発掘調査成果」『前方後円墳を考える』古代学協会四国支部第14回大会研究発表要旨集、古代学協会四国支部。
- 高松市教育委員会 1973『石清尾山山塊古墳群調査報告』。
- 高松市教育委員会 2000「横立山経塚古墳」『高松市内遺跡発掘調査概報—平成11年度国庫補助事業—』。
- 玉城一枝 1985「讃岐地方の前期古墳をめぐる二・三の課題」『末永先生米寿記念献呈論文集』末永先生米寿記念会。
- 都出比呂志 1986『竪穴式石室の地域性の研究』昭和60年度科学研究費補助金(一般C)研究成果報告書、大阪大学文学部国史学研究室。
- 寺沢薫 2005「銅鐸の終焉と大形墳丘墓の出現」『邪馬台国時代の筑紫と大和』ふたかみ邪馬台国シンポジウム5資料集、香芝市二上山博物館。
- 徳島県立博物館 1992『四国の古墳』。
- 徳島市教育委員会 1981『古墳時代の徳島市—埋蔵文化財資料展—』。
- 中溝康則・芝香寿人 1997「岩見北山積石塚群」『御津町埋蔵文化財分布調査報告書』御津町教育委員会。
- 中溝康則 1998「西播磨における積石塚墳墓群について」『網干善教先生古希記念論集』網干善教先生古希記念会。
- 中溝康則 2005「第1主体部上部構造の復元と祭祀」『綾部山39号墓発掘調査報告書』御津町教育委員会。
- 日本考古学協会昭和58年度大会香川県実行委員会 1983『香川の前期古墳』。
- 橋本達也 2000「四国における古墳築造地域の動態」『前方後円墳を考える』古代学協会四国支部第14回大会研究発表要旨集、古代学研究会四国支部。
- 廣瀬寛 2005「壺形埴輪の大型化とその背景—將軍山古墳出土壺形埴輪の検討から—」『將軍山古墳群Ⅰ』茨木市。
- 北條芳隆 1998「前方後円墳の誕生」『川と人間—吉野川流域史—』溪水社。
- 北條芳隆 1999「讃岐型前方後円墳の提唱」『国家形成期の考古学』大阪大学文学部考古学研究室。
- 北條芳隆 2000「前方後円墳と倭王権」『古墳時代像を見なおす』青木書店。
- 北條芳隆 2003『東四国地域における前方後円墳の成立過程』平成12~14年度科学研究費補助金基盤研究(C)(2)研究成果報告書。
- 森浩一・伊藤勇輔 1971『徳島県三好郡三加茂町丹田古墳調査概報』同志社大学文学部文化財学科。
- 渡部明夫編 1977『坂出市爺ヶ松古墳調査概報』香川県教育委員会。
- 渡部明夫・藤井雄三 1983『鶴尾神社4号墳発掘調査報告書』高松市教育委員会。



(1) 後円部



(2) 前方部



(3) 墳丘東側



(4) 墳丘西側



(5) 石材積上げ状況 1



(6) 石材積上げ状況 2



(7) 後円部東側落ち込み



(8) 白色円礫